



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	白石詞研究 : 清代から民国期にかけての詞論を中心として
Author(s)	張, 江林
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16666号
Issue Date	2025-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16666
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98276
Type	doctoral thesis
File Information	Jianglin_Zhang_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 張 江 林

学位論文題名

白石詞研究

—清代から民国期にかけての詞論を中心として—

・本論文の観点と方法

本論文は南宋の詞人姜夔（字は堯章、号は白石道人）の詞作品「白石詞」を対象とし、その美的特徴と、宋代から清代、さらには中華民国期に至るまでの受容及び評価の変遷を明らかにすることを目的とする。従来、姜夔の詞については「清空」「騷雅」といった表現で作風を総括する評論・研究が主流であったが、テキスト分析と後世の詞学理論、各詞派による受容の関係を総合的に扱った研究は十分とは言えない。本論では、白石詞が南宋から清代・民国期にかけて詞壇の理想像と見なされ、後世の詞人や評論家によって再解釈されていく過程を、詳細なテキスト分析と受容史研究の結合により明らかにした。とくに、白石詞では「冷」や「梅花」といった象徴的なイメージが、詞人の孤高の精神と当時の社会状況と結びつき、独自の美学を形成している点を考察する。また、浙西詞派や常州詞派など清代の各流派がそれをどう評価し、時代背景や詞学理論とどのように関連づけたかを比較し、さらに晩清から民国期の新たな文学思潮の中で白石詞が再発見され、研究対象として深化していった過程を明らかにする。これにより、姜夔の詞が詞学史全体における「清雅」観の典範として位置づけられていく過程を提示する。研究方法としては、光緒十九年刊行の楡園叢刻本『白石道人歌曲』を底本とし、夏承燾や陳書良らによる校勘本・箋注本を参照しながら詞句の細部を分析した。同時に、詞話や詞選、当時の文学批評における引用や評価を体系的に整理し、詞学者・評論家の評価軸を比較検討することで、受容の多様性とその背景を考察した。

・本論文の内容

序論では、南宋詞人姜夔の生涯と作品の概要を述べる。詞は唐代に発生し宋代に発展した韻文形式であり、姜夔の詞は「清空」「騷雅」と評され、婉約派や豪放派とは異なる詞風を確立した。姜夔は詩・詞・音楽に通曉しながらも官職に就かず、各地を漂泊する清貧の生活の中で文学的理想を追求した。その作品はイメージ描写や音律の調和を重視し、江西詩派の剛健な詩風や晩唐詩人の隠逸の趣向を学びつつ独自の詞学を築いた点に特徴がある。しかしながら、その詞は宋代末期から元・明代にかけて十分な評価を得られず、清代に入り、朱彝尊を中心とする浙西詞派などが白石詞を再評価すると、詞学理論の中で重要な位置を与える傾向が強まった。本論はこうした経緯を踏まえ、白石詞における修辞表現の分析を行うとともに、宋代から晩清民国期に至るまでの受容の具体的展開を跡づけ、詞学史の中での位置づけを再確認するものである。

第一章では、清代における姜夔詞の受容とその原因を論じる。白石詞の基本的風格として、自然の景物などを媒介に情感を控えめに託す表現が挙げられる。豪放詞が主流であった南宋詞壇において、姜夔は派手な愛国詩情よりも個人の内面情感を景物に寄せて詠んだ点が特異であり、この特徴は宋末元初の周密や張炎らに継承され「清雅詞派」と呼ばれた。清代では浙西詞派が白石詞を高く評価し、その音律の正確さや控えめな美しさを詞の理想として、積極的に詞選・詞話などに収録し、模範化した。これに対し常州詞派などは白石詞を形式に偏る傾向があると批判し、異なる立場から評価を下した。こうした各派の評価の相違は、詞学理論の発展段階と地域ごとの文人サークルが持つ思想的背景を色濃く反映している。本章では詞選・詞話・評論等の資料に基づき、姜夔詞が清代詞壇において果たした具体的な役割と意義を明らかにした。

第二章では、清代から晩清・中華民国期にかけての白石詞の受容の広がりをも具体的に追う。南

宋当時は詞選への収録が限られていた姜夔の詞は、清初になると再刊・選本が数多く制作されるようになり、特に光緒十九年の楡園叢刻本『白石道人歌曲』は代表的な底本として知られる。清代においては、浙西詞派を中心に多くの詞学者が白石詞を創作理念の規範とした。一方で常州詞派などのように、その表現に単調さを指摘する見解も存在した。民国期に入ると、王国維らによる宋词全体の再考が進み、白石詞は詞学史研究における重要な対象として注目を集め、校勘や注釈作業も活発化した。本章では具体的な詞選の選録状況や評論における引用事例を整理・分析し、白石詞が近代詞学研究の重要点として確立されていった経緯を示した。

第三章では、姜夔の詞における具体的作品分析を通じて、その詠物詞の特質とイメージを媒介とした情感表現の独自性を明らかにする。姜夔の詞には季節の移ろいや自然景物を詠みながら詞人自身の心情や境遇を託した作例が多く、「齊天樂 蟋蟀」などがその代表である。「齊天樂 蟋蟀」においては、コオロギという題材が秋の虫の鳴き声としての描写にとどまらず、詞人の孤独感、漂泊の思い、世俗からの離脱を象徴するものとして重層的に表現されている。コオロギは秋景を示すと同時に人生の無常を象徴し、詞人の寂寥感を際立たせている。また細やかな音律の操作により、コオロギの声と秋の冷気が相まって孤独感を一層増幅させる効果を生んでいる。さらに、「踏莎行 燕燕輕盈」では、夢の中の景物と現実の孤独とが交錯し、夢と現実の境界が曖昧になる構造が示されており、これも姜夔の詠物詞において多用される作法である。本章ではこれらの作品分析を通じ、イメージを媒介に情感を凝縮する姜夔独自の詠物詞の作法を提示した。

第四章は、姜夔詞に頻出する「冷」の表現に焦点を当て、その特徴と意義を考察する。姜夔は雪や寒風、氷などの寒色系のイメージを好んで詞中に取り入れ、世俗から距離を置き、孤高を貫く自己の姿勢の象徴として用いた。作品では梅や積雪が繰り返し描かれ、荒涼とした冬景の中でも梅花がひときわ清冽な香気を放つ様が、俗世と離れながら文学的理想を追求する詞人自身の生き様に重ねられている。こうした「冷」表現は、姜夔が終生流浪の身であったという現実とも呼応し、詩境に一貫した精神性を与えている。本章ではさらに、白石詞の「冷」表現が後代の詞人にいかに継承され、清代詞学者によっていかに評価されたかにも言及した。

第五章では、姜夔詞における「梅花」のイメージの役割を検討する。梅花は中国詩詞において伝統的に高潔の象徴とされてきたが、姜夔はこれを自身の漂泊する境遇や持って生まれた志を投影する媒体として特に重視した点に特徴がある。彼は放浪の生活の中で、孤立無援の梅花の姿に自らを重ね合わせ、理想とする清雅の美学を見出した。「暗香」「疏影」などの梅花詞において、梅花は単なる風景を詠う対象ではなく、夢や雪景色の中に配置されることで、詞人の孤高な心境や過ぎ去った時への追憶を喚起する媒体として機能している。さらに、姜夔の作品における感覚描写、特に多重的感覚描写の使用と、間接描写の手法（景色を借りて情感を表現し、典故を用いて感情を寄託し、擬人法を使って感情を転化するなど、直接的な感情表現を避けつつ、より婉曲的な、奥深い感情表現を指す）に着目した。

結論では、姜夔の白石詞が一時代の作品にとどまらず、清雅詞の典範として時代を越えて受け継がれてきた意義を明らかにした。また、これまで十分に論じられてこなかった詞中の表現やイメージの役割を掘り下げることで、文学作品の多様な受容と再解釈の可能性を示し、今後の詞学研究に新たな視点を提供することを試みた。